

態度の両価性が情報探索に及ぼす影響¹

平島太郎¹⁾ 土屋耕治²⁾ 元吉忠寛³⁾
吉田俊和⁴⁾ 五十嵐祐⁵⁾

問題と目的

人々の社会的行動や意思決定において、態度は重要な役割を果たすと考えられてきた (Allport, 1935)。態度とは「ある対象に対する好ましいー好ましくない (favorable-unfavorable) の評価によって表出される心理的傾向」と定義される構成概念である (Eagly & Chaiken, 2007; Bohner & Dickel, 2011)。ある対象についてポジティブな態度を有していれば、その対象に対して接近的な行動を取る可能性が高くなるだろうし、ネガティブな態度であれば、回避的な行動を取る可能性が高くなる。しかし、人は常にポジティブまたはネガティブな態度をもつわけではない。同じ対象について、同時にポジティブな評価とネガティブな評価を含む、両価的な態度をもつことがある。このような場合、人はどのように行動意思決定を行うのであろうか。本研究では、態度の両価性が情報探索を駆動し、行動に結びつくプロセスを想定し、特に、態度の両価性が情報探索を駆動するかどうかを検討する。

従来、社会心理学者は、態度によって行動を予測・説明することを目指してきた。ポジティブな態度は対象への接近行動を促進し、ネガティブな態度は対象からの回避行動を導くと考えられる (Fazio, Eiser, & Shook, 2004)。これまで多くの研究では、上記の態度の定義に基づき、ポジティブな形容詞とネガティブな形容詞を対とする尺度を用い、対象に対する全般的な態度を測定していた。そして、その対象に関する態度が行動を予測するというモデルを立て、行動プロセスの説明を試みてきた (Ajzen, 1991)。しかし、態度は必ずしも行動を予

測しないことが指摘されている (e.g., Cooke & Sheeran, 2004; Wallace Paulson, Lord, & Bond, 2005)。その理由のひとつとして、一般的に利用されることの多い、ポジティブーネガティブな形容詞対を用いた態度測定では、態度の全般的なポジティブさーネガティブさ以外の態度の性質を捉えきれていないことが挙げられる。

本研究では、行動の予測を導くような態度の性質のひとつとして、態度の両価性 (attitudinal ambivalence) に着目する。「対象に対する好ましさ」という態度の定義に基づくと、個人の態度は、ポジティブーネガティブを両極とする一次元上に布置することとなる。しかし、野菜を摂取することに対して「健康に良いがおいしくない」という評価を抱くように、人は同一対象に対し、ポジティブな連合とネガティブな連合を共に含む、両価的な態度をもつ場合がある (e.g., de Liver, van der Pligt, & Wigboldus, 2007; Kaplan, 1972; Pratkanis, 1989)。このような態度の性質を態度の両価性という (e.g., Thompson, Zanna, & Griffin, 1995)。態度の両価性には、態度対象に対するポジティブさとネガティブさを弁別して測定し、それらを組み合わせる指標化する構造的両価性と、ポジティブさとネガティブさが共存することで生じる主観的な不快感や葛藤感に焦点を当てた主観的両価性という2つの概念がある (e.g., Bassili, 1996; Newby-Clark, McGregor, & Zanna, 2002; Priester & Petty, 1996)²。たとえば、ポジティブーネガティブな形容詞対を用いて測定されるような全般的な態度が同じであったとしても、態度の両価性の程度に違いがある場合、態度の根底にある連合構造が異なったり、それによって主観的な葛藤が生じたりするため、態度が行動や情報処理に及ぼす影響に違いが出てくる可能性がある。ポジティブ・ネガティブな属性を共に含むような態度対象は、個人の態度も両価的になりえるため、そのような態度対象についての行動を予測・説明しようとする場合、態度の両価性を考慮する必要があると考えられる。

従来からの研究からは、両価的な態度は、態度対象に対する行動を導かない可能性が示唆される。一方で、態度の

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 五十嵐祐准教授)

2) 南山大学人文学部

3) 関西大学社会安全学部

4) 岐阜聖徳学園大学教育学部

5) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

両価性は、態度対象に関する情報探索を促進し、間接的に行動を導く可能性がある。本研究では、両価的な態度は直接的に行動を導かないものの、情報探索を経たうえで行動に結びつくという行動意思決定プロセスを仮定する。そして、そのプロセスにおいて、態度の両価性が情報探索意図と情報探索行動に及ぼす影響を検討することを目的とする。以下ではまず、両価的な態度は行動を導かないとする研究知見を紹介した後、態度の両価性が情報探索を駆動する可能性を検討する。

態度が行動を予測するモデルにおける態度の両価性の影響を検討した先行研究では、態度の両価性の高さが、態度と行動意図・行動の一貫性を低下させるという調整効果が報告されている (e.g., Armitage & Conner, 2000; Conner, Povey, James, & Shepherd, 2003)。たとえば、Conner, Sparks, Povey, James, Shepherd, & Armitage (2002) は、低脂肪食品、野菜・果物の摂取といった健康行動について、態度の両価性の調整効果を検討した。その結果、健康行動を行うことに対する態度の両価性が低い参加者では、全般的な態度がポジティブであるほど健康行動の頻度が高くなったが、態度の両価性が高い参加者では、全般的な態度は行動頻度を予測しなかった。すなわち、両価性が態度と行動の一貫性を低下させていたのである。この調整効果のメカニズムとして、両価的な態度は、ポジティブな連合とネガティブな連合を含むため、時間的に態度が変化しやすく、態度が行動を導かないとする説明 (Thompson et al., 1995) と、態度の両価性が態度に対する確信度を低下させたり、両価的な態度は態度アクセシビリティが低いため、態度が行動を導かないという説明 (平島・土屋・元吉・吉田, 印刷中) がある。いずれのメカニズムが働いているかは、完全には明らかになっていないものの、両価的な態度は行動を導かないという調整効果自体は、メタ分析によっても確認されている頑健な現象である (Cooke & Sheeran, 2004)。

一方、態度の両価性が情報処理に及ぼす影響を検討した研究では、態度の両価性が態度対象に関連する情報の処理を促進することが報告されている。両価的な態度は、個人にとって不快感をもたらしたり (e.g., Nordgren, van Harreveld, & van der Pligt, 2006)、自らの態度に対する確信度を低下させたりする (Bassili, 1996; Jonas, Diehl, & Brömer, 1997; Petty, Tormala, & Briñol, 2006)。態度の両価性をもつことは、不快感を低減させ、態度を確実なものにしようという動機づけを高める結果、態度対象に関連した情報の処理を促進するのである。たとえば、架空の商品を態度対象とした Jonas et al. (1997) の実験では、商品に対する態度の両価性が高い参加者は、

低い参加者よりも、態度対象に関する思考をより多く行っていた。また、Nordgren et al. (2006) では、態度対象に関する思考を明示的に求めなくとも、態度の両価性が態度対象に関する自発的な思考を促すことが示されている。さらに、移民に対する態度の両価性と移民に関する情報の処理との関連を検討した Maio, Bell, and Esses (1996) では、態度の両価性の高さが説得文の精緻な処理を促進することが報告された。これらの知見は、呈示された情報の処理や思考を行う場合に、態度の両価性が態度に関連した情報処理を促進することを示している。

ただし、態度の両価性に関するこれらの研究は、実験者から与えられた説得文の処理や、個人内で完結する情報処理への影響を扱うにとどまっており、社会的ネットワークやマスメディアの影響といった、社会的な文脈を考慮していないという問題点がある。両価的な状態を解消しようとする動機づけが、現実的な世界においてどのように機能するかを明らかにするためには、態度の両価性が説得文の処理や個人内の思考といった能動性の低い情報処理に及ぼす影響だけでなく、他者やマスメディアへの情報探索といった、より能動性の高い情報探索に及ぼす影響についても検討する必要がある。

Hänze (2001) は、態度の両価性が、より能動的な情報探索を促進することを示唆する結果を報告している。この研究では、ドイツ人を対象に、場面想定法 (街頭でドイツ政府に対して NATO の軍事介入への参加を中止するよう求める嘆願書にサインをするよう求められる) を用い、軍事介入に対する態度の両価性と、嘆願書にサインすることにまつわる行動意図との関連を検討した。その結果、両価的な態度を有する個人は、嘆願書にサインをするに對し、即座の決断を避け、情報を集めて判断について精緻化しようすることが示された。すなわち、態度の両価性は、単に与えられた情報についての処理を促進するだけでなく、より能動的な情報探索を駆動する可能性が考えられる。ただし、Hänze (2001) は場面想定法における態度の両価性と行動意図との相関関係を検討したにすぎず、態度の両価性が実際の情報探索行動を促進するかどうかは明らかでない。

そこで本研究では、縦断調査によって、態度の両価性が情報探索意図を高めるだけでなく、情報探索行動を駆動するかどうかを検討する。両価性を有する具体的な態度対象としては、女性サンプルにおける「子宮頸がん検診の受診」を取り上げる。子宮頸がん検診を受診することに対しては、がんを予防し、自らの健康を維持できるというポジティブな評価が存在する。その一方で、検診には、「面倒くさい」、「時間がかかる」といったコスト

認知（子宮頸がんから女性を守るための会，2008）や、羞恥心や恐怖心といった感情（Buki, Borrayo, Feigal, & Carrillo, 2004）に基づくネガティブな評価も存在する。このように、子宮頸がん検診の受診には、ポジティブな側面とネガティブな側面があり、検診を受診することに対する個人の態度が両面的になりうると考えられるため、本研究の目的を検討する上で適切な態度対象といえる。

また、子宮頸がんは、発症メカニズムが明らかにされており（井上，2008）、子宮頸がん検診の有効性も確認されている（厚生労働省，2009a）。インターネットでの検索といったコストの低い情報探索によっても、子宮頸がん検診を受診することに好意的な情報へのアクセシビリティが高いため、態度の両価性が情報探索行動を駆動した結果、子宮頸がん検診の意図が高まると考えられる。

以上の議論から、本研究では、態度の両価性が情報探索を駆動し、行動を導くというプロセスを想定し、態度の両価性が情報探索意図と情報探索行動に及ぼす影響を二時点の縦断調査によって検討する。具体的には、(1) 態度の両価性が情報探索意図を高める、(2) 態度の両価性が情報探索行動を駆動する、(3) その結果、初期の態度の両価性がその後の行動意図を予測する、の3点を検討する。

方法

本研究は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けた上で実施された。

調査対象者

愛知県内の女子大学生270名（平均20.1歳， $SD = 1.26$ ）を対象に、二時点（Time 1, Time 2）の縦断調査を実施した。Time 1とTime 2の間隔は2週間であった。また、調査は講義時間内に行われた。

質問紙の構成

一般的な手続きとしては、Time 1で心理変数を測定したのち、Time 2において、2週間の間に子宮頸がん検診に関する情報探索行動を行ったかどうかを尋ねた。

子宮頸がん検診を受診することに対する態度の両価性（Time 1） 態度の両価性の指標として、構造的両価性と主観的両価性の2つの指標を用いた。態度の構造的両価性は、態度構造の根底にあるポジティブ評価とネガティブ評価の程度を強く反映した指標であり、態度対象に対するポジティブ評価とネガティブ評価を弁別して測定した上で算出する。一方、態度の主観的両価性は、態度の両価性のもつ葛藤（conflict）や不快感（discomfort）、緊張（tense）、活性（arousal）といった主観的な側面により焦点を当てたものである（e.g., Newby-Clark et al.,

2002; Priester & Petty, 1996）。先行研究では、態度の両価性の機能を検討する際、2つの態度の両価性の指標を明確に区別していなかった（e.g., Hänze, 2001）。本研究では、構造的両価性と主観的両価性の有する機能が異なる可能性を考慮し、両方の指標を用いることとした。それぞれの指標の測定方法は以下の通りである。

1. 子宮頸がん検診を受診することに対する態度の構造的両価性：従来の態度の両価性研究において広く利用されてきた、Kaplan（1972）の手続きにのっとり、子宮頸がん検診を受診することに対するポジティブな評価とネガティブな評価を別々に測定し、両得点を合成することで構造的両価性得点を算出した。ポジティブ評価（ネガティブ評価）の測定では、「子宮頸がん検診を受けることについての良いところ（悪いところ）についてのみ考えて下さい。あなたにとって、それらはどの程度良いと（悪く）感じられますか？ 悪い（良い）ところについては考慮せず、良い（悪い）ところだけを考えて回答して下さい」という教示のもと、「1:まったく良いと（悪く）感じられない」から「6:非常に良いと（悪く）感じられる」の尺度に回答を求めた。

2. 子宮頸がん検診を受診することに対する態度の主観的両価性：先行研究（Bassili, 1996; Hänze, 2001; Priester & Petty, 1996）を参考に、「子宮頸がん検診を受けることに対する私の感情は、複雑である」、「子宮頸がん検診を受けることに対する私の考えは、葛藤している」など9項目を作成し、検診を受診することに対する態度の主観的な両価性を測定した。回答は、「1:全く当てはまらない」から「6:非常に当てはまる」の6件法であった。

子宮頸がん検診を受診することに対する態度（Time 1） 子宮頸がん検診を受診することに対する全般的な態度をポジティブ・ネガティブな形容詞対を用いて測定した。「好ましくない—好ましい」、「害がある—有益である」、「心地悪い—心地良い」、「価値が無い—価値がある」、「悪い—良い」、「嫌い—好き」の6項目に回答を求めた。回答は、-3から+3までの7件法であった（0:どちらともいえない）。分析の際はネガティブ語を1、ポジティブ語を7と再得点化した。

受診意図（Time 1, Time 2） 行動意図の指標として、子宮頸がん検診の受診意図を測定した。「子宮頸がん検診を受けようと思う」、「子宮頸がん検診を受けるつもりだ」の2項目に対し、6件法で回答を求めた（1:全く当てはまらない—6:非常に当てはまる）。

情報探索意図（Time 1） 子宮頸がんや検診に関する情報探索の意図として、「子宮頸がん検診について本で調べてみようと思う」といった具体的な探索行動を取る意図を尋ねる18項目を作成し、6件法で回答を求めた（1:

全く当てはまらない-6：非常に当てはまる)。行おうとする情報探索行動によって、態度の両価性の影響が異なる可能性を考慮し、幅広い行動を項目化した（具体的な項目は情報探索意図の因子分析結果を参照のこと）。

リーフレットの持ち帰り (Time 1) 質問紙の冊子の最後に添付した子宮頸がん検診の啓発リーフレット（厚生労働省, 2009b）を持ち帰ったかどうかを、Time 1における情報探索行動の指標とした。質問紙の冊子の最終ページで、「この次のページに、厚生労働省が作成した、子宮頸がんに関するパンフレットが付いています。読みたい方は、このアンケート用紙から、引っ張って外し、お持ち帰りください」との教示を行った。行動は、「0：持ち帰りなかった」、「1：持ち帰った」としてコード化した。また、リーフレットは内向きに折ってあり、剥がさない限りは中身が見えないようにしてあった。

調査期間中の情報探索行動 (Time 2) 探索意図の18項目について、語尾を過去形に変え、Time 1からTime 2の間に行った探索行動を測定した（e.g. 「子宮頸がん検診について本で調べた」）。回答は、「1：全く当てはまらない」から「6：非常に当てはまる」までの6件法であった³⁾。

その他 性別、年齢といったデモグラフィック変数とともに、子宮頸がん検診の受診経験を尋ねた。

結果

分析対象者

過去に子宮頸がん検診の受診経験があった33名を分析から除外した。Time 1のデータの分析については、尺度への回答に不備があった者（25名）を除き、212名のデータを分析対象とした。また、Time 2のデータの分

析については、Time 1の分析対象のうち、2回目の調査にも参加し、尺度への回答に不備のなかった177名のデータを分析対象とした。

尺度の検討

態度の主観的両価性、態度、受診意図 態度の主観的両価性および態度の尺度について、探索的因子分析を行い、1因子構造を確認した。また、いずれの尺度も、項目間の内的整合性は十分に高かった。尺度得点の平均をTable 1に示す。

態度の構造的両価性 Priester and Petty (1996)に基づき、以下の手続きによって、各個人の態度の構造的両価性得点を算出した。まず、検診に対するポジティブ評価得点・ネガティブ評価得点のうち、得点の大きい方をLarge得点(以下、L得点とする)、小さい方をSmall得点(以下、S得点とする)とした。次に、L得点とS得点に対し、 $5S^{0.5} - L^{1.5}$ の式を適用することで、各個人の態度の構造的両価性得点を算出した。なお、ポジティブ評価得点とネガティブ評価得点の高さが等しい場合、両得点は互換可能であるため、ポジティブ得点をL得点、ネガティブ得点をS得点とし、指標を算出した。この指標は、ポジティブ評価得点とネガティブ評価得点と同程度である(=類似度が高い)ほど、あるいは、2つの評価得点がいずれも高い(=強度が高い)ほど、大きい値を示すという性質をもつ⁴⁾。態度の両価性得点の平均をTable 1に示す。

情報探索意図 情報探索意図を測定する18項目に対し、探索的因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行った結果、固有値の減衰状況(10.75, 1.96, 1.49, 1.02, 0.76, …)や解釈可能性から、4因子解を採用した。因子分析の結果をTable 2に示す。因子間相関が高いことから、1

Table 1 各変数の記述統計

	M	SD	α
Time 1 (n = 212)			
構造的両価性 ^{a)}	7.00	1.83	—
主観的両価性	2.97	1.09	.92
検診を受診することに対する態度	4.79	.82	.77
受診意図	3.17	1.24	.84
身近な人への情報探索意図 (F1)	3.21	1.08	.91
インターネットでの情報探索意図 (F2)	2.62	1.16	.90
専門的・公的な情報源への情報探索意図 (F3)	1.87	.92	.87
マスメディアを用いた情報探索意図 (F4)	2.88	1.03	.90
Time 2 (n = 177)			
受診意図	3.10	1.26	.90

^{a)} 理論的な得点範囲は-1.00から10.90である。

因子解での解釈も可能であったが、態度の両価性がどのような情報探索と関連するかを詳細に検討するため、第1因子を「身近な他者への情報探索意図」、第2因子を「インターネットでの情報探索意図」、第3因子を「専門的・公的な情報源への探索意図」、第4因子を「マスメディアを用いた情報探索意図」とする4因子解を採用した。各下位尺度得点の平均をTable 1に示す。

リーフレットの持ち帰り 質問紙の冊子の最後に添付した子宮頸がん検診の啓発リーフレットを持ち帰った回答者の割合は、全体の74.1%であった。

調査期間中の情報探索行動 探索行動（6件法）の全

18項目の平均は1.29 ($SD = 0.73$) であり、すべての項目において床効果が見られた。そこで、18項目のうち、少なくとも1つの情報探索を行った場合を1、何の探索も行わなかった場合を0として再コーディングした。その結果、何らかの情報探索行動を行った回答者の割合は、全体の59.3%であった。

態度の両価性と情報探索意図・情報探索行動との関連

態度対象に対する好ましきによる影響を除外して、態度の構造的・主観的両価性と情報探索意図・情報探索行動との関連を検討するために、態度得点を統制した偏相

Table 2 情報探索意図尺度の探索的因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）

	F1	F2	F3	F4	h^2	M	SD
F1: 身近な人への情報探索意図							
子宮頸がん検診についての家族の考えを知りたい	.877	-.089	-.049	.112	.769	3.37	1.45
子宮頸がん検診についての友人の考えを知りたい	.875	.296	-.208	-.188	.731	3.06	1.37
子宮頸がん検診についての家族の考えを聞こうと思う	.733	-.271	.220	.150	.694	3.11	1.36
子宮頸がん検診についての友人の考えを聞こうと思う	.700	.284	.140	-.234	.675	2.69	1.39
周りの人が、子宮頸がん検診を受けるかどうか、様子を見ようと思う	.653	.010	-.182	.062	.381	3.32	1.34
子宮頸がん検診について家族と話して情報を得ようと思う	.632	-.255	.219	.279	.712	3.03	1.39
子宮頸がん検診について友人と話して情報を得ようと思う	.561	.242	.128	-.081	.565	2.75	1.25
子宮頸がん検診についての正確な情報が知りたい	.478	.080	-.085	.300	.511	4.33	1.38
F2: インターネットでの情報探索意図							
子宮頸がん検診について、インターネットの掲示板や口コミサイトで調べてみようと思う	.059	.873	-.167	.026	.706	2.75	1.44
子宮頸がん検診について書かれているブログを見ようと思う	.005	.793	-.013	.030	.654	2.39	1.29
子宮頸がん検診についての情報サイトを見ようと思う	-.015	.678	-.001	.244	.718	2.87	1.37
子宮頸がん検診について、インターネットで、行政や自治体の情報を見ようと思う	-.049	.562	.406	.010	.697	2.39	1.36
子宮頸がん検診について、インターネットで、病院の情報を見ようと思う	.084	.459	.289	.128	.679	2.68	1.36
F3: 専門的・公的な情報源への探索意図							
子宮頸がん検診について病院に問い合わせようと思う	-.057	-.063	.998	-.098	.768	1.89	1.05
子宮頸がん検診について自治体に問い合わせようと思う	-.047	-.004	.928	-.143	.661	2.87	1.37
病院や自治体に子宮頸がんに関する冊子やパンフレットをもらいに行こうと思う	.002	-.003	.733	.112	.660	3.37	1.45
F4: マスメディアを用いた情報探索意図							
子宮頸がん検診についてのテレビ番組を見ようと思う	.027	.084	-.104	.845	.726	3.02	1.27
子宮頸がん検診のCMを見ようと思う	.074	-.006	-.086	.771	.580	2.92	1.20
子宮頸がん検診についての記事を新聞や雑誌で読もうと思う	-.018	.230	-.061	.738	.727	3.10	1.24
子宮頸がん検診に関する冊子やパンフレットを読もうと思う	.092	.151	.218	.479	.678	2.95	1.34
子宮頸がん検診について本で調べてみようと思う	-.090	.259	.319	.396	.629	2.42	1.06
因子間相関	F1	.579	.534	.659			
	F2		.559	.658			
	F3			.681			

Table 3 態度の両価性と情報探索の関連 (態度を統制変数とした偏相関, $n = 212$)

	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 構造的両価性	.31**	.04	.08	-.01	-.05	.00	.09	.07
2. 主観的両価性	—	.01	.22**	.11	-.07	.05	.12 †	-.01
3. 受診意図 (Time 1)		—	.48**	.38**	.46**	.43**	.03	.13 †
4. 身近な人への情報探索意図			—	.62**	.48**	.68**	.18*	.21**
5. インターネットでの情報探索意図				—	.55**	.74**	.10	.12
6. 専門的・公的な情報源への探索意図					—	.61**	.08	.14 †
7. マスメディアを用いた情報探索意図						—	.17*	.10
8. リーフレットの持ち帰り							—	.16*
9. 調査期間中の情報探索行動								—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

関係数を算出した (Table 3)⁵。その結果、態度の主観的両価性が高いほど、身近な他者への情報探索意図が高まり、またリーフレットを持ち帰るという情報探索行動が促進されていた。一方、態度の構造的両価性と情報探索の意図・行動との間には有意な関連が見られなかった。

受診意図 (Time 2) の予測

態度の構造的・主観的両価性と情報探索意図および情報探索行動が、Time 2の受診意図に及ぼす影響を検討するため、Time 1の態度と受診意図を統制して偏相関係数を算出した (Table 4)。その結果、情報探索意図および情報探索行動はTime 2の受診意図の有意な予測因となったものの、態度の構造的・主観的両価性とTime 2の受診意図との間に有意な関連は見られなかった。すなわち、Time 1でのリーフレットの持ち帰りという情報探索行動は、Time 2での受診意図を高めていたものの、態度の両価性は情報探索行動や受診意図には直接的に結びついていなかった。

考察

本研究の目的は、態度の両価性が情報探索を駆動し、行動を導くというプロセスを想定し、特に、態度の両価性が情報探索意図と情報探索行動に及ぼす影響を検討することであった。具体的には、子宮頸がん検診に関する縦断調査を実施し、(1) 態度の両価性が情報探索意図を高める、(2) 態度の両価性が情報探索行動を駆動する、(3) その結果、Time 1の態度の両価性がTime 2の行動意図を予測する、の3点を検討した。

分析の結果、子宮頸がん検診を受診することに対する態度の主観的両価性の高さは、身近な他者への情報探索の意図を高め、リーフレットの持ち帰りを促進していた。この結果は、個人が自らの態度の両価性を主観的に知覚することで、情報探索が駆動される可能性を示唆す

Table 4 態度の両価性と情報探索意図・行動が、Time 2の受診意図に及ぼす影響 (Time 1の態度と受診意図を統制変数とした偏相関, $n = 177$)

	受診意図 (Time 2)
1. 構造的両価性	-.07
2. 主観的両価性	.02
4. 身近な人への情報探索意図	.19*
5. インターネットでの情報探索意図	.20**
6. 専門的・公的な情報源への探索意図	.20**
7. マスメディアを用いた情報探索意図	.22**
8. リーフレットの持ち帰り	.13 †
9. 調査期間中の情報探索行動	.13 †

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$.

るものである。ただし、態度の主観的両価性についても、Time 1からTime 2にかけての情報探索行動を予測せず、能動的な情報探索については、身近な他者への探索意図を介した間接的な影響が観察されるにとどまった。また、態度の構造的両価性の指標は情報探索の指標と有意な関連を示さなかった。

先行研究では、態度の両価性が態度に関連した情報処理を促進することが報告されてきたが、その多くは実験場面における、実験者から提示された説得文の処理に関するものであった (e.g., Clark, Wegener, & Fabrigar, 2008)。態度の主観的両価性が喚起しても、その場で意思決定が求められない状況では、先延ばし方略が用いられることが指摘されている (van Harreveld, van der Pligt, & de Liver, 2009)。本研究では、子宮頸がん検診を受診するか否かという意思決定が求められていた状況ではなかった。そのため、態度の両価性が情報探索意図を

高めたり、情報探索行動を駆動する効果について、限定的な結果がみられるにとどまったと考えられる。ただし、リーフレットを質問冊子から取り外して持ち帰ることは調査参加者の任意の判断であり、呈示された説得文の処理や、個人内の思考といった情報処理と比べても、能動性が高い行動であるといえる。すなわち、本研究において、態度の主観的両価性がリーフレットの持ち帰りを促進していたことは、意思決定の期限が迫っている場合、態度の主観的両価性が能動的な情報探索を導く可能性を示唆していると考えられる。

身近な人への情報探索意図やリーフレットの持ち帰りといった情報探索の指標は、態度の主観的両価性とのみ関連を示し、態度の構造的両価性とは関連を示さなかった。その原因のひとつとして、主観的両価性と構造的両価性の2つの指標が態度の両価性の独立した側面を反映していることが考えられる。態度の構造的両価性は、態度構造に含まれるポジティブ評価とネガティブ評価の程度を反映する指標である。一方、態度の主観的両価性は、態度構造に含まれるポジティブ評価とネガティブ評価を知覚することによって生じる、不快感や緊張を反映する指標である (Newby-Clark et al., 2002; Priester & Petty, 1996)。すなわち、個人がある態度対象についてポジティブ評価とネガティブ評価の両方を有しており、態度の構造的両価性が高い場合でも、必ずしも態度の主観的両価性が高いとは限らない。実際、態度の2つの両価性指標が同じ概念を測定しているという前提に立ったとすれば、本研究におけるこれらの指標の単相関は、 $r = .38$ と高くはない。この点については、先行研究でも同様の結果が報告されている (e.g., $r = .40$: Thompson et al., 1995; $r_s = .36-.44$: Priester & Petty, 1996)。

さらに、態度の両価性に基づく不快な状態を脱するために、態度関連の情報処理が促進されるのは、多くの場合、態度の主観的両価性が高まった場合に限られる (Clark et al., 2008; Nordgren et al., 2006; van Harreveld et al., 2009)。態度の主観的両価性は個人内の葛藤の指標でもあるため、葛藤を解消するための態度関連の情報処理が促進される。すなわち、単に態度構造が両価的であることだけでなく、態度の両価性を知覚し、不快感が生じることによって、態度に関連する情報処理が促進されると考えられる。そのため、本研究においても、態度の構造的両価性ではなく主観的両価性によって情報探索意図・行動が動機づけられた可能性がある。

ただし、態度の両価性による情報処理の促進には、必ずしも主観的な両価性が必要ではないとする結果も報告されている (Petty et al., 2006)。したがって、本研究の結果から、態度の主観的両価性のみが情報探索を駆

動すると結論づけることはできない。例えば、Petty et al. は、主観的には単価的な態度であるが、態度構造が両価的である場合、態度への確信度が低下し、態度対象に関する情報の精緻な処理が行われることを示している。また、態度の両価性が情報処理に及ぼす影響については、態度が主観的に両価的であることによる不快感の低減 (Nordgren et al., 2006; van Harreveld et al., 2009) と、態度構造が両価的であることによる態度の確信度低下 (Jonas et al., 1997; Petty et al., 2006) という2つのメカニズムが提案されている。しかし、これらのメカニズムの統合は未だなされておらず、また本研究では、両メカニズムが相乗的あるいは加算的に働くことで情報探索が駆動すると想定したため、これらのメカニズムを弁別せずに検討を行った。今後は、態度の両価性が情報探索を駆動する条件を明らかにするために、これらのメカニズムを弁別して詳細に検討する必要がある。

また、態度の両価性が、他者の態度を知ろうとする身近な他者への情報探索の意図と関連を示したことは、社会的文脈、すなわち社会的ネットワークにおける態度の両価性の機能を考える上で、興味深い示唆を提供する。従来、態度の両価性に関する研究では、個人内過程の解明が主要な関心であり、態度の両価性の個人差をどのように捉えるかといった測定法や (e.g., Kaplan, 1972; Refling, Calnan, Fabrigar, MacDonald, Johnson, & Smith, 2013)、態度の両価性が態度と行動意図・行動との一貫性に及ぼす影響 (e.g., Armitage & Conner, 2000; Conner et al., 2003)、態度の両価性が情報処理に及ぼす影響 (e.g., van Harreveld et al., 2009) などが検討されてきた。しかし、近年、対人コミュニケーション (Pillaud, Cavazza, & Butera, 2013) や社会的ネットワーク (Visser & Mirabile, 2004) における、態度の両価性の機能を検討する試みが行われはじめた。本研究の結果は、態度の両価性が高い個人が、態度対象に関して他者が有している態度を参照しようとする動機をもち、他者への情報探索を能動的に行う可能性を示唆している。

他者を情報源とした探索行動を行った場合、他者の有する態度によって、その後の態度が影響を受けることを考えると、態度の両価性の機能を考えるうえで、個人がどのような社会的ネットワークに埋め込まれているかを考慮することは重要である。実際、特定のトピックに対して、自分と異なる態度を有する他者とのつながりをもつ個人は、そのトピックに対する態度が両価的になることも報告されている (平島・五十嵐, 2013; Visser & Mirabile, 2004)。社会的ネットワーク上の双方向の社会的影響を踏まえ、態度の両価性の機能を検討することは、死刑制度の是非や貿易の自由化といった、ポジティブな

側面とネガティブな側面を共に有する政治的なトピックについて、どのように世論が形成されるのかといった問題や、個人の投票行動の規定因を考えるうえで、今後の重要な課題であるといえる。

最後に、本研究の問題点について述べる。本研究は、女子大学生をサンプルとし、子宮頸がん検診の受診を態度対象としたため、異なるサンプルやトピックについても同様の結果が得られるかどうか、結果の一般化には慎重になる必要がある。また、多くの回答者にとって全く新奇な題材ではなく、既存の題材を態度対象としたことで、本研究の結果が知識量といった剰余変数の影響を受けている可能性もある。今後の研究では、新奇な態度対象を用いた実験的な検討や、喫煙や健康的な食行動といった他の健康行動や政治的なトピックなど、幅広い態度対象を題材として、態度の両価性が情報探索行動に与える影響を検討する必要がある。

引用文献

- Ajzen (1991). The theory of planned behavior. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, 50, 179-211.
- Allport, G. W. (1935). Attitudes. In C. Murchison (Ed.), *A handbook of social psychology*. Worcester, Mass.: Clark University Press. pp. 798-844.
- Armitage & Conner (2000). Attitudinal ambivalence: a test of three key hypotheses. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 26, 1421-1432.
- Bassili (1996). Meta-judgmental versus operative indexes of psychological attributes: The case of measures of attitude strength. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 637-653.
- Bohner, G. & Dikel, N. (2011). Attitudes and attitude change. *Annual Review of Psychology*, 62, 391-417.
- Buki, L. P., Borrayo, E. A., Feigal, B. M., & Carrillo, I. Y. (2004). Are all Latinas the same? Perceived breast cancer screening barriers and facilitative conditions. *Psychology of Women Quarterly*, 28, 400-411.
- Clark, J. K., Wegener, D. T., & Fabrigar, L. R. (2008). Attitudinal ambivalence and message-based persuasion: motivated processing of Proattitudinal information avoidance of Counterattitudinal information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 565-577.
- Conner, M., Povey, R., James, R., & Shepherd, R. (2003). Moderating role of attitudinal ambivalence within the theory of planned behaviour. *British Journal of Social Psychology*, 42, 75-94.
- Conner, M., Sparks, P., Povey, R., James, R., Shepherd, R., & Armitage, C. J. (2002). Moderator effects of attitudinal ambivalence on attitude-behavior relationships. *European Journal of Social Psychology*, 32, 705-718.
- Cooke, R. & Sheeran, P. (2004). Moderation of cognition-intention and cognition-behaviour relations: A meta-analysis of properties of variables from the theory of planned behaviour. *British Journal of Social Psychology*, 43, 159-183.
- de Liver, Y., van der Pligt, J., & Wigboldus, D. (2007). Positive and negative association underlying ambivalent attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 319-326.
- Eagly, A. H. & Chaiken S. (2007). The advantages of an inclusive definition of attitude. *Social Cognition*, 25, 582-602.
- Fazio, R. H., Eiser, J. R., & Shook, N. J. (2004). Attitude formation through exploration: Valence asymmetries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 293-311.
- Hänze M. (2001). Ambivalence, conflict, and decision making: Attitudes and feelings in Germany towards NATO's military intervention in the Kosovo war. *European Journal of Social Psychology*, 31, 693-706.
- 平島太郎・五十嵐祐 (2013). 社会的ネットワークの構成が態度の両価性に及ぼす影響 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 82.
- 平島太郎・土屋耕治・元吉忠寛・吉田俊和 (印刷中). 態度の両価性が行動意図の形成に及ぼす影響——子宮頸がん検診の受診を対象とした検討—— 実験社会心理学研究.
- 井上正樹 (2008). 2. HPVワクチンによる子宮頸癌予防ウイルス, 58, 155-164.
- Jonas, K., Diehl, M., & Brömer, P. (1997). Effects of attitudinal ambivalence on information processing and attitude-intention consistency. *Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 190-210.
- Kaplan, K. J. (1972). On the ambivalence-indifference problem in attitude theory and measurement: a suggested modification of the semantic differential technique. *Psychological Bulletin*, 77, 361-372.
- 厚生労働省 (2009a). 平成20年度厚生労働省がん研究助成金「がん検診の適切な方法とその評価法の確立

- に関する研究」班, 平成21年度「がん検診の評価とあり方に関する研究」班 (主任研究者 濱島ちさと) 有効性評価に基づく子宮頸がん検診ガイドライン 厚生労働省 (2009b). 20歳からはじめる子宮頸がん検診 一般向けリーフレット リーフレット公開のページ 2009年12月 <<http://canscreen.ncc.go.jp/ippan/leaf.html>> (2010年10月19日)
- Maio, G. R., Bell, D. W., & Esses, V. M. (1996). Ambivalence and persuasion: The processing of messages about immigrant groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, 32, 513-536.
- Newby-Clark, I. R., McGregor, I., & Zanna, M. P. (2002). Thinking and caring about cognitive inconsistency: When and for whom does attitudinal ambivalence feel uncomfortable? *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 157-166.
- Nordgren, L. F., van Harreveld, F., and van der Pligt, J. (2006). Ambivalence, discomfort, and motivated information processing. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 252-258.
- Petty, R. E., Tormala, Z. R., Briñol, P., & Jarvis, W. B. G. (2006). Implicit ambivalence from attitude change: An exploration of the PAST Model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 21-41.
- Pillaud, V., Cavazza, N., & Butera, F. (2013). The social value of being ambivalent: Self-presentational concerns in the expression of attitudinal ambivalence. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39, 1139-1151.
- Pratkanis, A. R. (1989). The cognitive representation of attitudes. In A. R. Pratkanis, S. J. Breckler, & A. G. Greenwald (Eds.), *Attitudes structure and function*. Hillsdale, NJ: Erlbaum. pp. 71-98.
- Priester, J. R., & Petty, R. E. (1996). The gradual threshold model of ambivalence: Relating the positive and negative bases of attitude to subjective ambivalence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 431-449.
- Refling, E. J., Calnan, C. M., Fabrigar, L. R., MacDonald, T. K., Johnson, V. C., & Smith, S. M. (2013). To partition or not to partition evaluative judgments comparing measures of structural ambivalence. *Social Psychological & Personality Science*, 4, 387-394.
- 子宮頸がんから女性を守るための会 (2008). 子宮頸がん検診に関する調査報告書 (要約版)
- Thompson, M. M., Zanna, M. P., & Griffin, D. W. (1995). Let's not indifferent about (attitudinal) ambivalence. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.), *Attitude strength: Antecedents and consequences* (pp. 361-386). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- van Harreveld, F., van der Pligt, J., & de Liver, Y. (2009). The agony of ambivalence and ways to resolve it: introducing the MAID model. *Personality and Social Psychological Review*, 13, 45-61.
- Visser, P. S., & Mirabile, R. R. (2004). Attitudes in the social context: The impact of social network composition on individual-level attitude strength. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 779-795.
- Wallace, D. S., Paulson, R. M., Lord, C. G., & Bond, C.F. (2005). Which behaviors do attitudes predict? Meta-analyzing the effects of social pressure and perceived difficulty. *Review of General Psychology*, 9, 214-227.

脚注

- 1 本研究のデータセットは、平島・土屋・元吉・吉田 (印刷中) と同じものを利用したが、研究目的が異なっている。平島他では、態度の両価性が、態度と行動意図の一貫性に及ぼす影響に関する分析結果を報告している。本研究では、データセットの内、態度の両価性が情報探索に及ぼす影響に関する分析結果を報告する。
- 2 態度の構造的両価性は、英語では potential / objective / operative ambivalence と表記されている。一方、態度の主観的両価性は、felt / subjective / experienced / meta-cognitive ambivalence と表記されることが多い。本研究では、各概念の特徴を踏まえ、それぞれ構造的両価性、主観的両価性と表記することとした。
- 3 情報探索行動 (Time 2) は自己報告であり、実際の行動を測定していないが、2週間の行動経験について尋ねていることから、行動指標としての一定の妥当性は担保されていると考えられる。
- 4 この指標の詳細な性質については、Priester & Petty (1996) を参照のこと。
- 5 好ましさによる影響を考慮する方法として、態度と態度の両価性の交互作用を検討する方法も考えられる。そこで、尺度得点の平均値で参加者を分割し、態度得点の高低 (サンプル内での相対的なポジティブ・ネガティブさ) × 態度の両価性得点の高低を要因とする、2×2の参加者間要因の分散分析を行っ

態度の両価性が情報探索に及ぼす影響

た。その結果、身近な他者への情報探索意図得点を従属変数とし、態度×態度の主観的両価性を独立変数とする分散分析において交互作用が有意であった ($F(1,208) = 3.73, p = .055$)。単純主効果を検討した結果、態度得点の高群では、態度の主観的両価性の高さによって身近な他者への情報探索意図の程度は変わらなかったが ($p = .54$)、態度得点の低群では、態度の主観的両価性が低い群よりも高い群の方が、身近な他者への情報探索意図が高かった ($p < .01$, Bonferroni 法)。この結果は、態度がネガティブであっても、主観的な両価性が態度対象に対する情報探索意図を高めることを示唆する。従来の研究では、全般的な態度がポジティブであるかネガティブであるかによって、態度の両価性の機能が異なることを検討したものはなく、理論的にも興味深い結果であ

る。ただし、本研究では、参加者の81%が子宮頸がん検診の受診に対してポジティブな態度を有していた。態度得点低群の参加者は、態度得点高群と比べて相対的にはネガティブな態度を有しているといえるものの、絶対値としてはネガティブな態度を有しているとはいえない。したがって、上記の分析結果をもとに、態度がポジティブあるいはネガティブであるかによって、態度の両価性の効果が異なるとはいいがたく、理論的にも分散分析の結果に対する説明は与えることが困難である。したがって、本研究では、態度のポジティブさーネガティブさが同じであっても、態度の両価性の水準によって、情報探索が促進されるということを示すために、態度得点を統制した偏相関を用いた分析結果を報告した。

(2013年8月30日受稿)

ABSTRACT

The effects of attitudinal ambivalence on information seeking

Taro HIRASHIMA, Koji TSUCHIYA, Tadahiro MOTOYOSHI, Toshikazu YOSHIDA, and Tasuku IGARASHI

We examined the effects of attitudinal ambivalence on information seeking. Attitudinal ambivalence reflects the extent to which one simultaneously has positive and negative evaluations toward the attitude object. While some studies report that ambivalent attitudes do not predict behavior, other studies claim that ambivalence promotes the processing of attitude-related information. In this study, we assumed the behavioral decision-making process in which attitudinal ambivalence would drive information seeking and then lead to behavior. In particular, we examined the effects of attitudinal ambivalence on the intentions to seek information and on the actual information seeking behavior. Female undergraduates ($n = 240$) participated in a longitudinal survey regarding cervical cancer screening. The questionnaire used in this study consisted of structural ambivalence, subjective ambivalence, overall attitudes, intentions to seek information, behavioral intentions (Time 1), and information seeking behavior (Time 2) with respect to undergoing a screening. Correlational analyses revealed that structural ambivalence did not associate with either intentions to seek information or actual information seeking. In contrast, subjective ambivalence predicted intentions to seek and information seeking. We also discussed the underlying mechanisms and further research directions with regard to attitudinal ambivalence and social networks.

Key words: Attitudinal ambivalence, Attitudes, Information seeking, Decision-making, Cervical cancer screening